

昭和十九年三月三日、河南省中牟県掲橋中隊復帰、一週間後中隊出発、南方転出のため集結地開封に向かう。

中隊長岡木史郎三月十三日開封出発、その際に開封市長が、私に記念品として掛軸を贈呈するといわれたが、南方にてどのような身になるかわからないからと、ご好意に感謝しつつ辞退した。

三月十五日青島着、桜丘に集結、二週間作戦準備のため滞在、玉兵団（南方派遣）第二方面軍直轄、青島港出帆、輸送船三池丸に乗船する。

たかが紙きれ されど紙きれ

兵庫県 本庄 昇

昭和十三年に勅令第一三九号による「陸軍予備士官学校令」が施行されると、甲種幹部候補生は陸軍諸学校に入学することが、義務付けられることになった。

この適用第一期生の我々は、無事教育課程を終了し、姫路に帰って見習士官に任官された。昭和十四年四月、

在姫歩、騎、砲、輜重の見習士官たちとともに、北支に駐屯していた第十師団ならびに第百十師団の予備役将校の補充要員として勇躍？征途についたのである。

天津に近い太塘に上陸して貨車に乗って北京の停車場に到着したときのことである。「名前を呼ばれた者は下車せよ！ 第百十師団付を命ず」という命令が出たために、この見習士官の一団は真二つに大別され、昭和十七年の満期除隊を迎えるまでの運命を大きく左右されたのである。

名前を呼ばれたものは勇躍（今度は本当に）プラットホームへ飛び出していたが、取り残された者は入学試験に落ちたように落胆して静まり返ったのである。というのは第百十師団は北支の治安維持を担当していたのであるが、第十師団は現役兵をもって編成され、中隊長は殆ど陸士出身者で占められていた。そして日華事変勃発以来ずっと蒋介石総統の正規兵軍団と戦ってきた師団であり、現在も漢口攻略戦を終えた後に北上してきて、鄭州をにらみながら付近の治安維持を兼ねて布陣してきたのである。

鄭州は鉄道の交差点の要衝で中国軍は難攻不落の要塞をかまえ、我々と敵精銳軍団との衝突が予想されていた。しかし俗に「予定は変更されるものであり、予想は外れるものでもある」というが、この予想ほど見事に外れた予想はなかった。

北京で下車した者たちの従軍した治安維持作戦は、困難を極め多数の犠牲者をだしたのである。貧乏クジを引いたと思っている見習士官たちを乗せた貨車は、京漢線に入りゆっくりと北支の平野を南下し、第十師団司令部のある石家荘のプラットホームへ滑りこんだ。

下車して整列した我々の前で副官の読み上げた一枚の命令書によって各々の運命の概略が決まったのである。私ともう一人は「衛生隊付を命ず」ということである。羨望の視線が二人に注がれた。解散すると「うまいことやったのう、お前らが一番安全や」と祝福された。

しかしこの予想も外れたのである。というのは彼らは全員無疵で満期除隊を迎えたのであるが、たった一人の犠牲者が、彼らから祝福を受けた私たち二人の中から出たからである。

私は衛生隊の駐屯地に到着して一週間ほど休養を兼ねて救急法、乗馬等の訓練を受けた。その後は文字どおり東奔西走である。

数多くの作戦に参加したが、その中での庄巻は山西省の第一軍が指揮下の全師団を動員しての一号作戦であった。これは正規軍が大挙して黄河を越えて山西省に侵入し、さらに北上を開始してきたからである。作戦が開始されて、河北省と山西省の省境を突破して、まず高い連峰と切り立った深い溪谷に度肝を抜かれた。

小道が溪谷を走っているが雨が降ると、ところどころ川底に沈んでしまう。傷病兵の後送には難渋させられた。そしてまた高い山へ登っての戦闘である。負傷兵の救出もさることながら、疲労のために多数の落伍兵が出てこの収容も大変であった。

比較的軽傷で軍医さんに栄養飲料（兵たちの間の通称で本当の名前は忘れた）とかいう今のドリンク剤のようなものをもらい、注射をしてもらって夕方まで休んで所属部隊へ送り届ける者が大部分だが、中には張切り過ぎて重体になり、野戦病院へ送らなければならない者も多

数出た。不幸にして私の戦友の見習士官もこの中の一人に入ったのである。私がかけた時に彼が私に残した言葉は「少尉の軍服を着るまでは頑張りなかつた」であつた。我々の将校行李の中には新調の少尉の軍服が用意されていたのである。彼は姫路へたどり付いたけれども、戦病死者として犠牲の第一号となつたのである。

作戦も片付いたと思つたところに「衛生隊のみ至急引き上げよ」との無線が入つた。部隊長は沈鬱な顔をして「ノモンハンで多くの損害が出たのではないかなあ」とつぶやかれた。それでノモンハンの敗北を知つたのである。

翌朝、我々の出発を見送つてくれた部隊長は、一通の封書を私に手渡して「これは大切なものだから封を切らずに君の部隊長に直接渡しなさい」といわれた。

別れを告げて五日間の急行軍の後に山西省の山岳地帯を抜け出して京漢線にたどり着いた。部隊長に手紙を渡すと開封するなり大変喜んでくれた。私はこの手紙のお陰で「勲六等单光旭日章」下賜の申請の米に浴した。これは同僚の中では第一回目であつた。

やがてノモンハンの停戦協定も成立したので、第十師

団は姫路に凱旋し連戦に疲れた将兵を帰郷させた。そして新たに現役兵を補充して北満の佳木斯へ出陣することになった。私の衛生隊も姫路で解散し、私は元の歩兵隊に帰つた。久しぶりに同僚と合流して待望の「新品少尉殿」となり、再出陣の用意に多忙な毎日を送つていた。

そんなある日突然、連隊副官に呼ばれ一枚の命令書を受け取つた。何と「将校学生として陸軍習志野学校に入校すべし」である。同僚たちは「弾丸に当たるよりましやと思わなしよがないのー」と慰めてくれたものであつた。

私の青春時代の全部を占める軍隊生活は、たかが一枚の紙切れにすぎない命令書によって、運命は右に左に大きくほんろうされたのである。私は誠心誠意これに服従して身命を賭して戦つた。それには天皇の大命が書かれていると心得ていたためであると回想している。